

読書の勧め

弁護士 志部 淳之介



私は文学部出身ということもあり、本を読むことが好きです。仕事用の鞆には、いつも小説を一冊忍ばせています。今年に入ってから読んだ小説の中から、お勧めのものを紹介したいと思います。

まず、京都を舞台にしたファンタジー小説として森見登美彦さんの「夜は短し歩けよ乙女」がお勧めです。主人公は「黒髪の乙女」に想いを寄せる「先輩」と呼ばれる青年です。青年は、黒髪の乙女とお近づきになるため、様々な策を弄して京都を駆け巡ります。同じ作者のファンタジー小説としては、「ペンギン・ハイウェイ」もお勧めです。主人公は、小学四年生の少年です。町にペンギンが突然現れる冒頭のシーンから、物語の世界に引き込まれます。同作者の作品では、「太陽の塔」も良かったです。面白おかしい作品かと思いきや、最後の最後でほろりときます。

京都を舞台にしたファンタジー作品としては、万城目学さんの「鴨川ホルモー」も単純に楽しめます。ホルモーとは、作者が創作した架空の競技ですが、その発想力に驚かされます。映画になった「プリンセス・トヨトミ」「偉大なる、しゅららぼん」よりも、「鴨川ホルモー」が好きです。

京都のつながりでいえば、村上春樹さんの「ノルウェイの森」で、主人公が想い人を追って訪れたのは、京都の山奥の診療所でした。同作者の作品は、1ページを読み始めた時から、体感温度が下がる感覚を覚えます。文章の内容は現実を描写したのですが、現実から非現実へと導かれます。本当に日本語の妙を知り尽くしていると思います。一文たりとも無駄な文がありません。初期の「風の歌を聴け」「1973年のピンボール」「羊をめぐる冒険」の三作も秀逸です。同じく初期作品として、「中国行きのスロウ・ボート」という短編集もお勧めです。こちらは、講談社文庫や新潮文庫ではなく、中央文庫から出版されています。

読み手の体感温度を下げると感じる作品としては、大崎善生さんの「パイロットフィッシュ」や中村航さんの「ぐるぐるまわるすべり台」もとても良い作品でした。人の心を斜めから捉えた文体が素敵です。

もっと、ストレートに感動したいという方には、浅田次郎さんの「霞町物語」がお勧めです。主人公の少年と

写真家の祖父の心の交流を描いた作品でした。浅田次郎さんは「鉄道員（ぽっぽや）」が有名ですね。

また、心を動かされるという意味では、吉本ばなさんの「うたかた／サンクチュアリ」「アムリタ」「キッチン」「TUGUMI」はいずれも名作でした。登場人物がとても魅力的です。

推理小説で驚かされたのは、宮部みゆきさんの「ソロモンの偽証」です。主人公は中学生ですが、同級生の死の真相を暴くため、卒業制作として「学校内裁判」を開催します。裁判は、警察、マスコミ、学校関係者、弁護士らを巻き込み、中学生達により大人顔負けの捜査、証人尋問が行われます。単なる推理小説の枠を超えた人間ドラマとなっています。

法廷物では、黒木亮さんの「法服の王国」が良かったです。著名な裁判をめぐる裁判官達のドラマや司法行政の内部事情、最高裁や権力の恐ろしさを垣間見ることのできる作品でした。

歴史物では、「ウルカヌスの群像」という9・11事件前後のブッシュ政権下のホワイトハウスやペンタゴンの政府高官の人間模様を描いた作品が秀逸でした。新保守主義と呼ばれる彼らの思想を通じて共和党と民主党との歴史的な関係やアメリカの政治のダイナミズムに触れることができます。

私は気に入った作品を何度も読み返すのが好きです。一文一文を噛みしめながら読みます。作者もまた、その一文から読者が想像する情景や心情を想像しながら作品をつくっているからです。小説は単なる情報ではありません。飛ばし読みをするのがもったいないのです。これからも、良い作品との出会いを大切にしていきたいと思っています。